

# スリフトの現代資本主義社会論の研究

## —— 非表象理論の展開 ——

大橋 昭一

### I. まえがき —— 本稿の課題

本稿は、イギリスの「ナイト」の爵位をもつ著名な論者で、ウォーウィック大学教授であり、オックスフォード大学招聘教授であるスリフト (Sir Nigel John Thrift) の 2008 年の書『非表象理論—空間・政治・情動』(Thrift, 2008) における所説のうち、現代資本主義社会をいかにとらえるかという点に焦点をおいて、理論的側面を中心に考察を試みるものである。その土台をなすものは「非表象理論」(non-representational theory) であって、その方法論的原理的特徴は、本稿筆者ですら別稿「スリフトの非表象理論 (NRT) の研究」(大橋, 2021) および「スリフトの非表象理論における社会理論の基本原則についての研究」(大橋, 2022) で論究している。本稿はその続編たるもので、3つの拙稿は、実質上一体のものである。

ちなみに、スリフトのこの書を書名は、『非表象理論』になっているが、その場合本稿論題との観点からすると、非表象理論の基本的特徴は次の3点にあるとみられる (Thrift, 2008, p.22)。

第1に、理論的 (theoretical) 領域と実践的 (practical) 領域との関連にかかわる問題である。これについては、一定の理論的難問 (conundrums) は実践的 (経験的) 領域で解決されるという考え方がとられる。すなわちそれは、経験的考察が主要なものという考え方をとるものであって、記号論的表象理論は不可というものである。

第2に、世の中はどのようにになっているにかかわる問題である。まず、人間以外のものの営み (inhuman endeavor) に関する領域では、新しい理論前線の全体 (a whole new frontier) について論究することが必要であり、こうした問題を新しい仕方に取り上げて、それらに典型的な関与の仕方や熱さ、強さと弱さ、関連性の強弱を含めて明らかにすることが必要とされている。

第3に、人間存在のあり方にかかわる分野である。ここでは、人間存在における強度化 (intensity of being) の進行が注目されるべきものとされるが、これによって人間の前認知 (precognitive) はどのような重みのものになっているかを考察することが肝要とされる。というのは、これによって、人間生活に対する倫理的関与のあり方が明らかにされうるからである、とされている。

本稿は、スリフト説において、こうした非表象理論の上にとって、経済的視点から現代社会が実際にどのようにとらえられているかを明らかにすることを課題とする。この場合スリフトのこの書の本文第1部 (実質的に) 冒頭の章 (通し番号で第2章) をみると、そのタイトルは「工夫を重ねて、さらに工夫すること (re-inventing invention) — 資本主義的商品化 (capitalist commodification)

の新しい傾向一」となっており、同書は、現代社会を、少なくとも経済的視点からは、何よりも資本主義社会ととらえ、その根本的な資本主義的特性はどのようなものかを提示しようとするものであると解される。そこでまず、この点の考察から始める。

## II. 現代資本主義のとらえ方

### (1) 現代資本主義の現象的規定

現代資本主義をどのようにとらえるかは、いうまでもなく、論者により様々である。近年の試みでさしあたり注目されるものに、スリフトによると、次のようなものがある (Thrift, 2008, p.23)。

例えばリー (Lee, B., 2000) らによる循環的資本主義論 (circulating capitalism), ラザラト (Lazzarato, M., 2004) らによる知的非物質的資本主義論 (intellectual and immaterial capitalism), ブータンク (Boutang, M. Y., 2005) らによる認知的資本主義論 (cognitive capitalism) である。

この上でスリフトでは、現代資本主義の形成上の特質 (formative tendencies) は次の点にあると提示されている。それは、まず全般的に言えば、人間の身体的経験 (bodily experience) について、その全体を超えたところにある“意識前” (anteconscious) に焦点があるものである。従って現代資本主義社会は、人間がますます本能的に動く社会になっているが、現象的には、商品とその生産工程を中心にしたところの、一時的なその場限りの (instant) な情況志向的な社会になっており、時間と空間について再定義を必要とするものになっている。

故にこれまでの伝統的な政治経済的概念、例えば労働 (labour), 階級 (class), 創造 (invention) なども再定義を必要とする。その場合現代資本主義社会は、現象的に言えば、何よりも「記号論的思考 (semiosis) の意図的な進展過程」となっていて、「記号の浸透過程 (a world perfused signs)」として把握されるものと提示される (Thrift, 2008, p.23)。以上まとめてスリフトは、“フルパレット資本主義” (a full palette capitalism : 全色配備的資本主義) とよんでいる (Thrift, 2008, p.42)。

### (2) 現代資本主義の本質的特色

その上で、現代資本主義のいわば本質を扱ったところの前記著作の第2章本文冒頭では、次のように述べられている (Thrift, 2008, pp.29-30)。まず、「現代資本主義は常に新しい利潤源泉 (new sources of profit) を求めているものである。故にそれが、次にどこに向かうかを示すことは、極めて難しい。ただし資本主義は、一定不変のもので、がむしゃらに進むというもの (a fixed unforgiving force) では決してない。しかしそれは、多元的な (heterogeneous) もので、その関係をグローバルにますます拡大してゆくダイナミックなプロセスを採るものである。その場合その結び付き (links) には、往々にして慎重で (awkward), その場限りのものがある一方、他方ではそれには驚くべきものがある。わけても思わぬ空間形成 (spatial formation) を生み出すことがあるものである」と規定され、さらに次のように述べられている。

すなわち、この第2章の課題は「ますますグローバル化するこの関係が強まっている今日の資本主義における、真に特性的な結び付き、つまり現代資本主義の心臓部をなすものと関連した結び付きを、解明することである。この結び付きは、商品の生産システムおよび商品化のプロセスと関連するものであり、そしてそれらを1つの一般的なテーマに織り込むものである」とされている。つまり、資本主義といっても、何よりも商品生産が根本をなし、その現在の特性を考察することがさしあたり課題になる、というのである。

この場合注目されることは、スリフトが、この上にたって、その根本的動因となるものは利潤獲得であるとし、そのための方法には2種類のものがあるとしているが、その際両者ともに、マルクス説に依拠したものとなっていることである (Thrift, 2008, pp.30-31)。1つは本源的蓄積 (primitive accumulation) すなわち絶対的剰余価値生産で、スリフトによると、例えば石油やガス、木材などを強権的方法で入手するもの、すなわち量的拡大 (extension) である。今1つは相対的剰余価値生産で、端的には生産性向上による利潤獲得、すなわち生産活動の効率化、イノベーションや創造活動の度合いを高めること、スリフトのいう結合的变化 (connective mutation) の向上、つまり生産活動の質の向上 (intensification) である。

後者の生産性向上による利潤獲得についてスリフトは、“未来から引き出されるもの” (pull of the future) と特徴づけている。つまりそれは、まず直接的には科学者たちの才能に依存したものであるが、しかしそれは、直ちに模倣という半意識的な過程を通じて容易に広まり、世の中は(単なる)工夫という絶え間のない無限の過程にあるものとして提示される。すなわちそれは、端的には、タール (Tarde, G.) が“経済的心理学” (psychologie economique) とよんだものとされている。

この上でこの著の第2章の論述をみると、まず、「概念上かつ実践上で密接に関連した問題」が論じられるものとなっているが、まず注目されるべきものは、スリフトが、基本的には20世紀の終わりごろまでに展開されてきたものであり、かつ、現在の変動的時期に対しては胎児的意義 (embryonic form) があると認められる、としているものである。それは具体的には、例えば教養として広まっている、技術的なものを含む一般的な知識をいうもので、スリフトはそれらが、現在では広く一般に知的なもの (intelligence) あるいは知識として流布されるものになっていることが実に特徴的なことであるとするとともに、しかもそれが、現在、結局は、企業の商品生産に役立つものになっていると位置づけ、ここに現代資本主義の大きな特色があるとする (Thrift, 2008, p.32)。

もとよりこれは、消費者を含む人々の深層意識 (forethought) において生まれているものであるが、ここでスリフトが力説することは、現在では消費者が、深層意識にあるそうした一般教養的知識をもって商品形成に参画しているということである。というよりは、今やそうした形でないと、企業は有益な商品形成ができない時代になっているということである。そこでスリフトは、これまでのような商品形成を“企業専属的な”考え方 (corporate perception) とよび、そうした時代は終わり、今や消費者も商品形成に参画している時代になっていることを強調する。資本主義といっても、こうした消費者参加の時代になっている、というのである。

これは、商品生産にかかわる現代資本主義の特徴として、スリフトがなかならず強調するものであるが、かれは、そこで2点を強調する。第1に、今や商品生産について生産と消費とを分離することができない時代になっているということである。スリフトは、「生産者は、力点を消費者の場においているし、消費者は、製品をより良きものにするために、知的知識に基づく工夫を行い、生産者に提示している。…故に換言すれば、今や(工夫を含む)イノベーションはどこにおいてもなされる。それは(いわゆる本来の、工場中心的な)分業的生産工程のどこかの隙間といったところでなされるものに限定される必要がない」(Thrift, 2008, p.33: カッコ内は本稿筆者のもの、以下同様)と提議している。これは、現代資本主義に関するスリフトの第1のテーゼたるものである。

この場合、もともとスリフトは、現代西欧資本主義を次のようなものとしてとらえている(Thrift, 2008, p.34)。すなわち西欧資本主義は利潤減少に悩んできた。西欧資本主義は第二次世界大戦でブームを迎えたが、しかしそれを契機に過剰生産、過剰設備に陥り、長らく業績低落傾向にあった。1995~2000年以降における情報技術化の一層の発展も特段の作用をするものではなかった。

こうした動きの中で浮上してきたのが、消費者刺激の方策、消費者を原点にするイノベーションの方策であった。ただしそうした試みの多くは、当初は所期の成果をもたらさなかった。しかしスリフトのみるところ、これが、今や変わりつつある。というのは、資本主義経済を新しい強力なシステムとして再生し、発展させるエネルギーが生じつつあるからである。それは、端的には、商品との対峙方法を、旧来のものとは異なる仕方にするもので、時間そのもの(time itself)の再結集を図ること、すなわち時間の結晶化についてこれまでとは異なった仕方を取り、何よりも消費者との交互作用を不断に向上させるものであって、消費者の意向に合うように生産と市場を整えること、そうした観点でイノベーションも行うものと措定される。

そしてこのことを可能にするものが、第2のテーゼである、消費者も商品のイノベーション(invent, invention, innovation: ここでは意識的には「工夫」。本稿では「工夫」とも表記している)に参加している、というものである。その基盤をなすものは、上記の一般消費者における商品に関する多少の専門的知識を含む教養的知識の進展・向上で、スリフトによると、今や消費者のそうした知識を含めた“知識共同体”(communities of knowledge)が形成されている。すなわち、工夫を含む“イノベーション空間の活動的な技術体”(active engineering of the space of innovation)が生まれ、一団の社会的集団による“社会的エンジニアリング”(social engineering of groups)が展開されるものになっている、と提議されている(Thrift, 2008, p.33)。

そしてこの場合の指導原理となるものは、効用性(efficacy)とされている。ここで効用性とは、これまで因果関係(causality)にあるとされてきた科学のおよび文章的な規定(the scientific and literary metaphors)よりも一層効用があるものと規定される。もともとこれは、スリフトによると、これまでのグローバル資本主義論で明確に論じられてきたものではないが、真に有効な分析力をもつと提議されるものである。

というのは、今日のように（消費者による工夫を含む）革新、イノベーションが全面的に展開されている社会では、経済の操作性（operativity）として、これは極めて肝要なものであるからであり、かつそれは、以前とは異なった価値を代表し、関与させるものであるからである。ただし、この変化は、旧来のような知識（knowledge）や創造性（creativity）といった言葉では示されないものであり、efficacyとよばれるべきものであると力説している（Thrift, 2008, p.33）。この点は、スリフトによると、何よりもまず、活性化（activating）として問題になるものであるが、それには3者がある。それを以下で順次考察する。第1に、深層意識の活性化である。

### Ⅲ. 活性化の理論

#### (1) 深層意識の活性化

ここにおける課題は、要するに、商品との対峙方法を再検討することである（以下本項はThrift, 2008, p.35ff.による）。中でもこれは、次のことをいう。すなわち、人間知性や知的労働と目されているものの範囲は、資本主義では一般に拡大する傾向にあるが、その一部として深層意識の動員（mobilization）が行われることである。

この場合、認知すること（cognition）は、確かに人間実践の出発点になる局面であるが、しかしそれは、多くの場合、脆弱な一時的なもので、常に崩壊する危険を内在するトンネルのごときのものである。故に今日では、これをさらに進化、発展させ、非認知的な（non-cognitive）過程、すなわち深層意識という巨大な貯水池という領域まで拡大し、活用させることが課題になっている、とスリフトは提議する（Thrift, 2008, p.36）。

それは、約言すれば、「考え方や意思決定の底流となっているもの（undertow）の高度化、活性化を強調するものであり、いわば直観の働きを強めるようオープンに訓練すること（an open training of intuition）をいうものであって、関係者たちの情動（affect）に一層留意するようにすることである」が、なかんずく次のことが、すなわち「消費者たちについて、かれらの情熱（passions）と熱中（enthusiasms）を通じて、かれらを感情面で動員し、かくて商品販売量を高めること」（Thrift, 2008, p.37）が目標とされていると特徴づけられる。

すなわちスリフトは、こうした考え方によって、消費は、何よりも一連の情感的領域（a series of affective fields）という特色をもつものになることを強調する。そしてこのことは、例えばデザインの動向にはっきり見られるという。すなわちそれは、今や重点がますます「脳美学」（neuroaesthetics）におかれたものになる。ただしこれは、あくまでも“適正なもの”（the right thing）を追求することであって、“現代資本主義に特徴的な様式”と規定されるものである（Thrift, 2008, p.38）。これが、活性化についての第2点である。次にこの点を考察する。

## (2) 消費者創意性の活性化

この部分の冒頭でスリフトは次のように書いている（以下本項は Thrift, 2008, p.38ff. による）。「近年特徴的なことは、それぞれの商品について記号的独自性（the signature）を拡大する試みが進展していることである。これには2つの方法がある。1つは、当該商品の痕跡が時間的に長く続くようにすることである。今1つは、その内容、つまり質を向上させることである。ただしそれは感情に訴える面の特徴を強めるものである」。そしてこのことを達成するために、大別して、3つの戦略が展開されてきたという。

第1に、商品の開発・展開を絶え間なく推進するために必要な“価値提案”（value proposals）を行うところの“プロジェクト作業方式”（project working）の展開である。これにより「企業の多くはますます“プロジェクト調整者”（project co-ordinator）というだけのものになっただけでなく、当該企業の通常の業務すらも外注するもの（outsourcing the business-as-usual parts）となり、当該企業には、必要な生産方法をデザインして設計し、（企業のいかんによると）製造する仕事だけが残るようになったものである」（Thrift, 2008, p.38）。これらでは、要するに、消費者の意向を採り入れることが要諦となっている。

第2に、商品の持続期間あるいは使用用途を拡張するよう（extending the commodity）試みるものである。これは、通常、“商品の尻を長くすること”（long tails）といわれるが、これはつまり、市場開拓を新しい方法で行うことである。例えばアマゾン社のマーケティング方法などをいうものである。

第3に、1つの商品が多くのものの共鳴体（resonating）として機能するようにすることである。これまでは無関係と思われてきた用途があることを推進するもので、1990年代に“新しい経験的経済”として喧伝されたものである。

スリフトは、これらでは、感覚的なデザインとマーケティングがキーポイントになると総括するとともに、「ここで問題であることは、特殊な様式のイノベーション（a particular mode of innovating）が求められていることである。それは、端的には、当該商品について“単純に新製品を創り出せばいい”と考えることから脱皮して、それによって“新しい世界（new world）を創り出す”ことを使命にすると変わっているものである」（Thrift, 2008, pp.39-40）と論じている。

もっとも本稿筆者としては、まず問題となるものは、上記の戦略の第1のもので、今やイノベーションが、当該企業を超えて、消費者やその他の関係者を含めて展開されるものになっていると提起されていることであると考えられる。すなわちそこでは、消費者は、それぞれの商品を取り巻く一種の技術的生産共同体に取り込まれたものになる。

この場合イノベーションは、少なくとも消費者の場合、新製品の全面的な開発や革新とは異なるところの、工夫というべきレベルのものである場合が多いと考えられる。すなわちそれは、実際的には、例えば消費者でも生まれるところの、商品のデザインやスタイル、あるいはマーケティング上や配送上の措置についての改善や工夫をいうものである。それは「関係者の相互

交流的行為 (interaction) の特定の様式から生まれるところの、反復的な改善行為 (iterative improvements)」をいうものであって、本性的には、むしろ模倣というべきもの (imitative) である。こうした工夫・改善が、生産企業でいわゆるイノベーションとして採り入れられるところに、現代資本主義の特性があるとスリフトは強調しているのである (cf. Thrift, 2008, p.41)。

ただし、こうした消費者を含めた商品共同体は、時として単なる気まぐれなファンサークル (fickle fan) のようなもので、その生成や存在を予期するのは実に困難なものが多いことも事実である。しかしスリフトは、今や「消費者は、商品生産共同体に巻き込まれたものになった。…市場は、単に商品を販売するだけの場というようなものではなくなっている。生産物の価値 (value) は、当該の生産企業が消費者とともに展開している (co-development) 経験の中にある」(Thrift, 2008, p.42) と提議している。

ここには、現代マーケティングのいわば本質が提起されている。スリフトは、今日のイノベーション、つまりオープン・イノベーションとはこうしたものと規定し、生産と消費とが入り混じったものと提議し、市場の意味も変わるものとする。例えば価値連鎖 (value chain) の観点からすると、旧来、市場は、どちらかといえば、価値連鎖の外にあるもの、単なる通過点と解されてきたが、「今や市場は、価値連鎖の外にあるものではない。生産者と消費者との交流 (interchange) の場として機能するものである」と規定される (Thrift, 2008, p.42)。

このことは、すなわち場所 (space: 土地, スペース) の活性化の問題でもある。これが、活性化についての第3の問題である。次にこの問題を取り上げる。

### (3) 場所の活性化

スリフトは、既述のように、以上のような今日の資本主義を“フルパレット資本主義”と特色づけているが、そうした資本主義では、「innovation と invention (ただしここでは“工夫”も含む) を推進するために、場所すなわち土地の一層の活性的な使用が決定的な要因になる」と提議する (以下本項は Thrift, 2008, p.42ff. による)。すなわちそうしたイノベーションが広がり、展開されるための環境として“思考のためのスペース” (thinking space) が必要というのである。とりわけ肝要なことは、そのスペースが“封印されていない” (not sealed) ことである。つまり多くの可能性に満ちたインスピレーションを発揮できる場所として自由な状態にあることが不可欠である、というのである。

この場合インスピレーションは、さしあたり情報 (information) として現れるから、「こうした思考スペースの構築には、多くの情報技術の協働的实践が必要である」(Thrift, 2008, p.42) とする。つまり、スペースの活性化は情報技術の機能のいかんの問題とされるのであるが、この際現代の情報技術には、次の5つの特性があるとされている (Thrift, 2008, p.42)。

第1に、情報はごく少量のものが、多くの人に即時的に伝わるものである。第2に、この情報のアクセス性の強さは、商品生産については、生産物へのアクセス性が、単に関係ある企業

側にあるだけでなく、消費者側にもあるところに根源がある。第3に、情報の接続性はほとんど自動的になされる。つまり情報は、情報自体で自動的に広まる。第4に、その場合情報の透明性が保たれる。これは確かに過大評価されてはならない点であるが、例えばフェイクニュースには、多くの場合それを打ち消す情報がある。故に全体的にみて、透明性が担保されているといえる。第5に、情報は間断がない。これにより再帰性 (reflexivity) が生まれる。

以上は、多くの論者により、例えば“ポスト現象学的な商品形成” (post-phenomenological commodity architecture) あるいは“準現象学的モデル” (quasi-phenomenological models) として論じられているものであるが、スリフトによると、しかしそれらは要するに、「物財性 (materiality) について感受的なもの (the sensible) で再定義し、スペースを輝かしいものとすることによって、より多くの利潤獲得を意図したものに他ならない」 (Thrift, 2008, p.43)。

もっともこの点は、スリフトによると、スペースには、例えば人間同士の学習やイノベーションが遂行されるために、人や集団はどのような相互作用関係にある必要があるかを定める要因でもある点が重要と提議されるものである (Thrift, 2008, p.44ff.)。

以上の上にとってスリフトは、理論的には、次に価値 (value) とは何かについて考え方を変えることが問題になると提議する。

#### IV. 価値概念の修正

スリフトは、この個所の冒頭で、次のように述べている。「以上の様々な展開について1つの共通した要因を見出すことは、実に困難である。私 (スリフト) として論じたいと思っていることは、原理的には要するに、価値あるもの、すなわち価値形態 (value form) を成すものはどのようなもので、どのように変化するかという問題である。価値を生み出すものは、もはや仕事の際の労働 (labour at work) だけに限定される必要は全くない。それは、生活 (life) のすべての領域で生まれるものである。その過程は、例えば消費者では、人生初期の教育・訓練から、その後における能力を駆使した工夫の発揮などに至るまでの全生活であり、生産者では、その持てる力が実を結んで、一定の成果を挙げ続けるまでの全生活が該当するものである」 (以下本項は Thrift, 2008, p.48ff. による)。

その上で、さらに次のように、すなわち、資本主義は、人間の全生物政治的分野 (the whole biopolitical fields) を必要とするものになっている。それは、例えばマルクスが『経済学批判要綱』 (Marx, K., 1857-1858) で“直接生産力としての一般的知性” (the general intellect as a direct force of production) とよんだものであり、ネグリなどが“一般的社会的知識” (the general social knowledge) といっているものである (Negri, 1991), と規定している (Thrift, 2008, p.48)。

かくてスリフトは、「これらの生産活動上の主観的 (subjective), 感情的 (affective), 意志的 (volitional) な側面は、労働の非肉体的 (immaterial) 側面であるが、しかし剰余価値搾取の主たる



源泉 (the main sources for the extraction of surplus value) になっているものである。…これは、今や資本主義が、人間存在の (知性等も含め) 全体を枠内に取り込んでいることの重大な標識である」(Thrift, 2008, p.48) と提議している。

もとより人間知性がどの程度資本主義的機構内に採り入れられているかについては、種々な見解がある。そのことを認めた上でスリフトは、「人間労働は、確かに資本主義的企業では全部的にコントロールされた存在ではないが、しかし基本的には、全体的に組織の中に組み込まれた存在であることを否定できないもの」であると規定し、例えばすでにタール (Tarde, 1902) が、価値形態を“使用価値” (valeur-utilité), “知識価値” (valeur-verité), “美的価値” (valeur-beauté) の3者に分けているところを参照して、3者に分けるのが妥当としている (Thrift, 2008, p.49ff.)。ただしこの場合、価値として問題となるのは、実体的には適正性 (rightness) であるから、その3者は次のようなものになるという (Thrift, 2008, pp.50-53)。

- ① 用具性という意味での一般的文化的モデルとしての適正性 (rightness as a general cultural model of instrumentality) : タールのいう使用価値に相当するもので、目的達成のための用具性において適正なことをいう。
- ② 知識のガバナンス性における適正性 (rightness as a mode of governance of knowledge) : タールのいう知識価値に相当し、消費者でも商品について工夫をする場合、それ相当の質と量の知識があることをいう。
- ③ 美的性としての適正性 (rightness as an aesthetic) : タールのいう美的価値に相当し、デザインなど美的なことが価値をもつことをいう。

以上の上にならって、さしあたり現代資本主義論のまとめ的概括が提示される。

## V. 現代資本主義論の意味

スリフトのこの段階におけるまとめによると、以上の資本主義論でスリフトの言わんとしていることには、現代資本主義論の3大分野といえる3つの特徴的な事柄がある。進行上 (procedural) のもの、政治上 (political) のもの、理論上 (theoretical) のものがあるということである (以下本項は Thrift, 2008, pp.53-55 による)。

進行上のものとは、要するに、「生産者—消費者」という実践過程の中核をなすものの間における結び付きのいかんを問うこと」である。それは、確かにもともと流動的な (fluid) ものであったが、(生産者と消費者との、例えば担当する) 機能を分ける仕方は、近年、ますます異色の (bizarre) で、複雑なもの (bitter) になっていると特徴づけられるものである。

ただしこれは、スリフトによると、最も根本では、同一企業が、一方では本源的蓄積という形で絶対的剰余価値生産に努めると同時に、他方では例えば情報化の推進という形で、すなわち新しい資本主義という形で相対的剰余価値生産を目指すものになっているところに問題の根

源があると提議されるものである (Thrift, 2008, p.50)。つまり、今日の資本主義を最も強く特色づけるものは、絶対的剰余価値生産と相対的剰余価値生産との併行的進行を整合的に行うよう試みがなされる点にある、というのである。

故にこれは、直ちに政治上の問題となる。すなわちこれは、政治的には2つの道として現れる。1つは、余り抵抗のない所において、あるいは一般消費者を当然の味方として、自由に進撃する (leviathan) 方法である。今1つは、体制的な知識階層 (brainy classes) の協力を得て、いわゆる民主主義的に支配を拡大し、充実する方法である。

もっともスリフトとしては、こうした政治的な行き方は賛成できないし、実際にもこのように進むことが成功するとは限らないとしている。というのは、例えば消費者側でこのように、つまり企業すなわち生産者の望むように動かない場合が結構あるからである (Thrift, 2008, p.54)。

次に理論上の問題としては、直接的には社会理論 (social theory) が対象になるが、ここでは総括的にいえば、一定の手掛かりになるもの (discomfort) がある。例えばバイタリズム (vitalism) の再検討 (reconsideration) もしくは再構築 (reworking) である。さらにシステム論の再生も視野に入るかもしれない、とされている。

ただしこの場合、ビジネスに関する理論では議論が多いかもしれないとされている。というのは、スリフトのみるところ、多くの場合、この論議ではカッコ付きでなされているからである。ところでここで提起されているものは、スリフトによると、「まさにビジネスにおいて現在起きているものであり、ほとんどすべてがビジネス上のイベントにおいて、商業的に共鳴性をもって推進され、広くは価値概念の全般的再規定によって利得 (gain) とされているものにかかわったものである」。

しかしこの上にたつてスリフトは、総括的には、「資本主義は、実際には期待を広めつつあるものであり (carpeting expectation)、かつポテンシャルを実現しつつあるもの (capturing potential) である」と述べ、この部分の締めくくりに言葉としている (Thrift, 2008, p.58)。

次に、この上にたつて、現代資本主義社会論の一環として自然環境に関わる問題が論じられる。

## VI. 自然環境に関わる考え方

### (1) 問題の所在

ここにおける問題は、スリフトによると、次のところにある。すなわち、現代資本主義社会は、商業的利得 (commercial gain) を獲得するために、本来は中立的な (neutral) ものであるところの、物質的基盤の上において活動が展開されているものであるが故に、その方策はどのようなものかについて論究することが必要になる。その際物品 (goods) を作り出すために“裸の世界” (bare life) に入り込むことが、多様な問題を生む根源になっていると提起される。

この場合“裸の世界”とは何かについて、スリフトは次のように規定している。まず一般的

には、それは「認識と行為との間の“短い時間スペース” (small space of time)」をいうものであり、かつそれは「企業が、商業的利得を生み出すために、この新しい領域における活動についての方策をますます熟達させている」と特徴づけられるものとしている (Thrift, 2008, p.24)。

ただし西洋社会における自然についてみると (Thrift, 2008, p.56ff.), それは、端的には、“身体上 (body) かつ時間上 (time) において限定のあるもの”と規定されるのであって、ここで対象になるものは、例えばロマンティズムやモダニズムのようないわば伝統的な考え方にたつものではない。それは「むしろ、自然についての新しいとらえ方、すなわち人間がこの世界を身体的にとらえるところの、短いが、しかし重要な意味をもつ時間に対し、ますます大きな有用性を与えることに立脚するものであり、そしてそれこそは、われわれが自然 (nature) と感じる多くのもの」をいうものである。

この場合さらに注目されることは、スリフトの志向せんとするものが、近年一般に“バイタリズム”といわれるものについての論議を見直そう (restate) とするものであることである。ただしそれは、次の方法で、すなわち、そうした考え方に往々にして見られるような、時間や身体等についてのもったいぶった哲学的論議などは、これを超越し、例えばすでに1999年グロス (Grosz, F. (ed.), 1999) が提起しているような「身体的実践 (body practices) を社会科学的見地から、つまり資本主義的事業 (capitalist business) の観点からとらえる方法」である。

そしてこうした観点からすると、「自然は、身体的実践の展開の結果として現代世界について熟考したり (contemplate), 神秘主義的に (mysticism) 考える際のキー的要因になるものであり、もともとは古代や中世に特有なものであって、今さらその意義を問われるようなものではない。ところがそのようなものが、今日のような狂乱的 (frantic) といっている資本主義的世界において、例えば猛々しいジャーナリズムなどで取り上げられるものになっている。例えばそれは何故かが、解明されるべきテーマになるというのである。

もとよりこうした状況や問題は、すでに多くの論者により論究されている。しかしスリフトとしては、この問題を現時点において解明するためには、これを次のような6つの段階 (stages) で取り上げることが肝要とする (Thrift, 2008, p.57)。

- ① 表象理論的考え方 (representational thinking) の枠にとらわれないようにすること。つまり非表象理論 (non-representational thinking) により物事を考える理論的段階,
- ② 物事のスピードを速める世界になっていること (the go-faster world) について論究する段階,
- ③ (世の中は魅力のないもの (disenchanted) になっているとする見解が多いが) スリフトとしては「再び魅力あるものになっている」 (re-enchanted) ことについて論じる段階,
- ④ 背景としての自然 (nature as background) について論じる段階,
- ⑤ この世界は果たして“裸の世界”かということを改めて問う段階,
- ⑥ 偉大な屋外生活 (the great outdoors) について論じる段階。

以下ではこれら6者について順次管見する。

## (2) 非表象理論的考え方について

スリフトの非表象理論について詳しくは、2つの別拙稿（大橋, 2021, 2022）および本稿冒頭ですでに提示しているが、ここではスリフトは、具体的には、自然、身体および時間の問題として改めて4つの互いに深く関連している考え方を提起している。これらはスリフトの非表象理論の4つの源泉と考えることができる（以下本項は Thrift, 2008, pp.57-63 による）。

第1に、生物哲学的論者たち（biological philosopher or philosophical biologists）による形態変更的動物行動学（reconfigured ethology）で、例えばそれぞれの個性性と勢力性を描き出すのに最適な方法とされているものである。

第2に、エムボディメントの非認知的次元（non-cognitive dimensions of embodiment）で、この点に関しスリフトは、身体実践（body practices）について種々な角度より多くの研究がなされて、人間生活の多くは認知以前の次元にあるものであることが解明されているが、しかし現在では、その多くはパフォーマンス研究（performance studies）や非表象的地理学（non-representational geographies）などにおいてのみ意味あるものになっているとし、さらに次のように述べている。「人が、人間というものは考えるために行動するものと言ったり、人間は行動することによって学習するものと述べたりするときには、われわれの思考（thought）と知識（knowledge）について再形成（refigure）が必要ということが表明されているのである」（Thrift, 2008, p.58）。

第3に、対象（object：事物）により強い重点をおくものである。ただしそれは、あくまでも「身体は、生物的文化的本能の1つの合成物（a composite of biological-cultural instincts）」として考えるものである。それは、例えば大工作業で大工（の頭腦的働き）と道具とが一体的なものになることをいう。故にスリフトによると「例えばラトゥール／ヘルマン（Latour, B. and Hermant, B., 1998）では、こうしたことについて、単に対象で考えられることを実現することとしか規定されていないが、それは物事の一面しか見ていないものであって、それと同時に、というよりはそれ以前に、対象（例えば材料や道具など）を前提にどのように仕事がなされるかについて思考のなされること（企画）が肝要であり、すべての事物は反響するもの（resound）と考えるべきである」（Thrift, 2008, pp.59-60）と提議している。

第4に、身体実践にかかわるものであり、人間本能の行動生物学に該当するものであって、例えばフーコーなどの所論に負うものである。しかしスリフトは、こうした身体実践が人間生活にどのような影響を及ぼすものであるかは、ごく少数部分が解明されているに過ぎないと評している（Thrift, 2008, p.60）。

以上総括して、スリフトがここで主張せんとしていることは、その土台が、最も根本的には、生物哲学やパフォーマンス研究にあるということであるが、理論的にみると、結局ここでスリフトが非表象理論というものは、ラトゥールらの物財重視的方向性と、フーコーらの人間意識重視的方向性とのいわば折衷的立場にあるものと解される。

### (3) スピード化社会についての考え方

この点についてのスリフトの立場は、一言でいえば、スピード化社会の現実を正しくとらえることが必要ということを強調するものである（以下本項は Thrift, 2008, pp.63-67 による）。そのため一方では、一般的に多くの論者ではスピード化の現実が必ずしも正しくとらえられていないと批判するとともに、他方では、スピード化のもたらしている現実を改めて直視し理論的に解明すべきことを主張するものになっている。

すなわちまず前者については、「この点（スピード化）を強調している文献の多くは、物事の明白な力の発揮の様態について問題が全然ないものとして描くところの、単純な技術決定主義（a simple technological determinism）に立脚するだけのものになっている」と評し、これではこうした新しい物理的な力がどのように文化に採り入れられているかを論じることは不可能になっていると指摘している（Thrift, 2008, p.63）。

その上になつて、これは時間の問題であつて、ここ 150 年ほどの間に起こった“時間の全般的な再構成”（a general reconstructing of time）として考察することが必要とする。ただしそれはスリフトによると、端的には、現時点における動作（movement）を構成し価値づけるところの、身体の動き（body practices）に現象しているものであり、端的には動き方の感覚（kinaesthesia）すなわち（旧来的な第 5 感ではなくて）第 6 感（a sixth sense）として注目されているものであるとする（Thrift, 2008, p.63）。

さらにここで注目されるべきことは、こうした動作についての知見が増すことは、新しい資源が生み出されることを意味するとされていることである。ただしそれは、“現在に志向した静けさ”（a present-oriented stillness）を生み出し、それを価値あらしめる資源である。故に例えば現在志向的な（present orientation）政治を促進させるものとして現れるものであるとし、そうした現在志向性には 4 つの思考上の源泉があると提議している（Thrift, 2008, pp.64-65）。

第 1 に、フーコーらに代表される考え方で、いわゆる観想（contemplation）に重点があるものである。例えばアサド（Asad, T., 1993）が提起しているような、（宗教などに見られる）確固たる信仰というよりは、（信仰的な）行為を行うことに志向したところの、パフォーマンス志向（aptitude of performance）をいうものである。

第 2 に、身体動作の効率向上に志向した身体運動合理化論（body measurement）の高揚である。これは、例えばアメリカのテイラー主義に代表されるいわゆる科学的管理の考え方をいうもので、とりわけギルブレスによって進展が図られた微細動作研究をさすものである。これはその後、周知のように、スポーツ科学などに大いに採り入れられている。

第 3 に、現在なかならず写真撮影の盛況にみられるところの、一時的静止的瞬間の体験に焦点をおいたまなざし（a still, contemplative gaze）に志向したものである。スリフトによると、こうした瞬間的なまなざしに志向した考え方は、すでに 18 世紀に、すなわち資本主義的社会の生成とともに始まったものである（Thrift, 2008, p.65）。

第 4 に、スポーツ活動などの身体的トレーニングに代表されるもので、細部にわたる身体運

動の蒸留化的実践 (distillation of detailed body practices) である。これも 20 世紀後半になって未曾有の発展を遂げたものである。

これらを総括してスリフトは、「知覚のスピードアップであるとともに、スローダウンであるもの」(Thrift, 2008, p.65) と締めくくっているが、本稿筆者としては、“スピードアップとともに瞬間把握の傾向” もしくは“瞬間動作向上によるスピードアップ化の原則” というべきものとする。

#### (4) 再魅力化についての考え方

この点についてスリフトは、冒頭において、「社会科学と人文科学を吹き飛ばすような衝撃を与えてきた最も顕著なもの1つは、『モダニティについて魅力がない』とする論調であった」と提起するとともに、この種のいわゆる純粋性追求 (purification) の論調は、西洋社会の人気を急速になくすようにしたものである。しかもこのことは、現在ではバイタリスト志向的な考え方 (vitalist ways of thinking) が起きていることによって、依然としてなくなっていないことが改めて認識させられるものになっている、と書いている (以下本項は Thrift, 2008, pp.65-67 による)。

もっともこうしたバイタリストの考え方は、スリフトによると、一種の“神秘的なもの” (mystical) の追求とっていい方法で推進されてきたものである。つまりそれは多くが、例えばアニメーション的方法 (animation) と遊び的行為 (play) が重なり合った過程として展開されているものであり、その結果は2重的なものである。すなわちそれは、一方では静穏さ (tranquility) を生み出すとともに、他方では無我夢中の状態 (trance) を作り出すような刺激に満ちたものと特徴づけられる。ここには結論的にいって、(本稿筆者のみるところ例えばポストモダンといわれてきたものに代わる) 現代社会についてのスリフトの規定がみられるが、これを特色づけるものとして、スリフトは次の3点を挙げている (Thrift, 2008, pp.66-67)。

第1にこれらは、神秘的コミュニケーションすなわち知能的および身体的な技術について多様な形で展開されているものであり、他者との種々な形の出会いや会話を可能にするものである。もっともそれは西洋文明の長い歴史の上になつたものである。すなわちそれは、例えばキリスト教文化、ロマン主義の自然尊重主義、東洋から入ってきた文化、近年のニューエイジの考え方 (New Age thinking) をいわば総合しているものである。

第2にこれらは、形式的な儀式的なもの (ritual) を重視する考え方に志向するという特色をもつ。すなわち、様々なパフォーマンス的形式を通じて、それに内包された意味を提示するものという特性を持つ。つまりそれらは、帰属性 (affirmation) をパフォーマンス的に確認することに志向したものである。それは例えば、ダンス、音楽、演劇、芸術作品の傾向に見られるもので、実際には広大な経験 (oceanic experiences) に志向し、パッションを充満させるもの (amplifying passions) である。

第3にこれらは、身体的セラピー (body therapy) つまり身体的健康さに志向したものである。例えばダンスではダンスセラピー、音楽では音楽セラピーなどである。

総括的にいえば、これらのものは要するに、生体エネルギー論 (bioenergetics) に立脚したもので、“非認知層” (non-cognitive) に訴えて身体的健全性を高めるものといえる。

### (5) 背景としての自然についての考え方

以上のようなスリフトの説は、かれ自身の言によれば、現在社会を観想的な神秘的な展開 (contemplate and mystical development) とみるよう総括されるものであるが、それは他方において、「全体としてみるならば、自然を背景とし、自然のとらえ方に関して全く独自の体験 (quite particular experiences) をもたらすもの」として提示される (以下本項は Thrift, 2008, pp.67-69 による)。

この場合そうした自然についての体験は、いわば“ボディ化された非意識性” (an embodied unconscious) として、つまり身体において (望ましい) 自然的なものが現出するよう (不要な葉や芽を取り落とすような) 整除することが行われるもの (exfoliations of body) として提議される。その上でスリフトは、こうした熱中化方法 (immersive practices) は、バイタリズムの新しい形を生み出すもので、こうした生物政治学的領域は次の3つの形で促進されてきたとする。

第1に、ウォーキングである。ただしツーリズムや観光のためのものではなく、あくまでもウォーキングそのものである。これはスリフトによると、19世紀以来、人間の身体的動作を盛んにするために行われてきたものであるが、動きの中で静けさ (stillness) を求めるものであって、観想的神秘的なコミュニケーションの手段としても有用なものと位置づけられる。

第2に、それぞれのスペースにおいて身体をどのような状態におくかの様式にかかわるものである。例えばツーリズムにおいてある場所に赴いた際、その場所の風景を特定の個所からみただけで終わるのか、あるいは、その風景の中に溶け込むような行動をするかといった問題である。ここにはなんらかの形で身体が動くところの、一種の発生学 (genetics) があると、スリフトはしている。いわば自然による期待 (expectation) の実現である。

第3に、さらに積極的に、対象となる自然を、関与する者の意図に合わせて変えたりするものである。それは「身体が、自然の事物を通じて空間と時間を作り出すもの」 (Thrift, 2008, p.68) である。自然の設定変更 (configuration) である。故に、次には“裸の世界”が問題となる。

### (6) 裸の世界についての考え方

この項の冒頭でスリフトは、裸の世界という概念は、もともとフーコー説信奉者や全体主義国家論者を中心に保持されてきたものであるが、そうしたいわば閉じ込められた (immured) 領域から、現に有効なものとして取り出したのは、何よりもアガムベン (Agamben, G.) であったとし、アガムベンの所論をかなり長く引用し紹介している (Agamben, 1998, cited in Thrift, 2008, pp.69-70)。

それによるとアガムベンは、このことに関するフーコーのテーゼは訂正されなければならない。少なくともそれは未完成のものであるから、完成されなくてはならない。というのは、現代の政治を特徴づけるものは、(過去の、例えばローマ帝国時代の) 都市 (polis) にあったような裸の生

活という幻影 (illusion) 的なものではないし、生活そのものが国家権力の発露の主たる対象というものでもないからである。そして (これまでの歴史をみると)、確かに一方では、国家権力が人間を懲戒対象として扱うことがあったが、他方ではしかし、なかんずく現代の民主主義の発展に照応した動きがあり、人間は生きている者として、政治権力のもはや単なる対象 (object) でなく、主体 (subject) として存在するものという認識にたつて、すべての事柄は動いているようになっている、と述べている。

スリフトによると、裸の世界の意味はここに明らかになっている。しかしこれまでのところ、そのいわば活性化までは論じられていない。つまり今や裸からの脱却が必要である。その要諦となるものは、生物政治学の考え方であり、消費者主義である、とされる。

この上にあつてスリフトは、この「完全に新しい政治が行われるに至るまでの間は、すべての理論とすべての実践はこの方向で動き、美しい日常生活が生まれるであろう。この点は、確かにアガムベンでも提起されている。それは、裸の生活からの脱却の政治であるが、こうした半秒遅れの政治 (politics of the half second delay) は、生物政治学的領域の拡大を必要とするものであつて、国家あるいは国際的資本主義 (transnational capitalism) の投資や施策では不可能なところの、それを越えたものである必要があるであろう」と述べ、この点についての結びの言葉としている (Thrift, 2008, p.70)。

### (7) 偉大な屋外生活についての考え方

ここでまず目につくことは、スリフトがこの問題を何よりも資本主義的企業 (capitalist firms) の動きと関連づけていることである (以下本項は Thrift, 2008, p.70ff. による)。スリフトは要旨次のように書いている。すなわち、資本主義的企業は、裸の世界について種々な知識を集めている。それは、かれらが新しい生産物として、すなわち身体を活気づける生産物として生み出しているものである。ただしそれは、“経験経済” (experience economy) として、つまり付加価値 (added value) を生み出すための“新しいジャンルの経済活動” (a new genre of economic output) としてである。そしてこの場合、こうした経験経済の主たる分野として次の4種があるとされている。

第1に、ツーリズムである。スリフトによると、ツーリズムの中でも、1960年代以降では、場所 (space) をテーマにした新しいツーリズムが盛んになっている。これらは、余暇の享楽に集中するというよりは、例えばツーリズム地にある博物館や遺産的場所、テーマパークなどの訪問に重点をおくものである。そこでそれぞれの土地では、その場所の意味を打ち出すようになった。さらにスキーやロッククライミングのようなスポーツ的なことも盛んになった。

第2に、スポーツと運動 (exercise) である。これらは現代経験経済のキ要的要因となっているものであり、知識を含む身体的行為を形作るものである。その多くは、特定の場所・スペースとの結び付きがあるものであつて、かつ、マスコミの関心も高いものである。

第3に、演技すなわちパフォーマンスの高揚である。この分野が盛んになったのは、同じく



1960年代以降で、ステージ的なものばかりではなく、街路上のものもそうである。かつ、人々の服装などでもそうした動きが現れた。

第4に、教育におけるパフォーマンス化である。教育の仕方はますますいわゆるアクティブなものに、さらに感覚に訴えるもの (sensuous) になっている。

ちなみに、ここで挙示されている1960年代(昭和35年以降)は、日本では所得倍増をスローガンに高度経済成長が始まった時期で、基本的には1990年代初頭のバブル経済崩壊まで続いたものである。

スリフト説に戻ると、以上のような経験経済の4つの注目分野が指摘された上で、「資本主義的企業は、こうした動向を我が物とし、世界的にこうした動きに対応するものの生産に努めている」(Thrift, 2008, p.71)と措定され、その特徴点は次の4点にあるとされている。

第1に、広告活動 (advertising) の推進である。第2に、感覚に訴える商品 (sensorializing goods) の販売である。例えば、もともとは極めて単純な商品が、感覚に訴えるようデザインして売りに出されることである。第3に、経験がパッケージで提供されるもの (packaged experiences) の盛況である。第4に、身体を動かすことに役立つような商品の提供である。これにはスポーツ用品以外にバーチャルリアリティの実現を志向したものも含まれる。

これらのものについて、総括的にスリフトは、ここで「われわれが目にするものは、裸の生活が改めて裸にされて解剖され、再び販売可能な、熱中することを誘引する経験として提示されているものである。土地景観 (landscape) も同じである。それらは長い年月をかけて作り上げられたものであるが、それを経験することが売り物にされているものである。こうした活動は、われわれに対し小休止 (pause) を与えるはずのものであるが、しかし(今や経済活動として)貨幣を得るために経験の新しい領域を提供するものとなっており、その歴史をみると、一言でいえば、それまではただ(無料)であったものが、代金を必要とするものになる歴史であったようにみえる」(Thrift, 2008, p.73)と書いている。

## (8) 小括

以上の上にならばスリフトは、こうした資本主義的体制下における自然のあり方を中心にした社会の状況について、全体としては悲観すべきものではないとし、希望 (hope) があるものとしている。例えば裸の生活に対する関与の仕方についても、以上で述べた動きからそう言える。もっともその中には、経済システムの末端にあるものもあるが、そこでパフォーマンスの王国というべきものが築き上げられているものもある。そしてそうしたものを理論化する試みもある、としている。

その上で「これらをまとめていえば、こうした生物政治学の種々な形態には、人間存在を発展させる契機があり、それが盛んになる多様な時期が今後も続くものと解される。これらは確かに小さなことではあるが、無視されていいというものではない。小さなものが大きなものに

なることは、実によくあることである」(Thrift, 2008, p.74)と結んでいる。ここに、スリフトの現代資本主義社会論の総括的規定が提示されている。

## VII. あとがき —— 簡単な結語

以上においてスリフトの非表象理論に立脚した現代資本主義社会論の概要を考察し、折りに触れて本稿筆者の見解を提示してきた。本稿筆者のみるところ、以上のスリフト説は、一言でいえば、下部構造である生産力レベルにおける変化、端的には消費者をも巻き込んだ工夫もしくはイノベーション状況から、上部構造である人間意識のパフォーマンス志向に至るまでを全面的に解明したものであり、スリフトのいうフルパレット資本主義の全様相を原理的に明らかにしたものであって、現代社会論として注目すべきものと思料される。

この場合スリフト説で理論上強く注目されることは、一方では、現代資本主義の解明にあたってマルクスの古典的といっている所説が基礎におかれるとともに、他方では、現代社会の分析にあたって、例えばリオタールらの提唱に関わるいわゆる“ポストモダン”の考え方が採られていないことである。もとよりこれは、1つのことの2面である。一言でいえば、両者ともに、根本的にはマルクス説が今日でも有効ということを示すものである。

この点をさらにはっきりさせるため、スリフトのこの書の索引をみると、そこには“マルクス”(Marx, K)、“ギデンス”(Giddens, A.)、“ポスト構造主義”(post-structuralism)はあるが、例えば“リオタール”や“ポストモダン”という項目は全くない。当然、多くの参考文献の中にリオタールの書は全くない。つまり、“ポストモダン”などは、この書で取り上げる必要が全くない、単なるジャーナリスティックな言葉に過ぎない、という見解である。

ちなみに、イギリスの著名な産業社会学論者、ワトソン(Watson, Tony)は、2017年の大綱的著書(Watson, 2017)で、現代社会における労働(ただし基本的には企業における雇われ労働)のとらえ方の1つとして、マルクス主義唯物史観を紹介し、その現代における展開形態といえるブレイバerman(Braverman, H., 1974)らが提唱した労働過程論(labour process)を挙げている(Watson, 2017, pp.68-76: 詳しくは大橋, 2020)。

この労働過程論は、周知のように、マルクス主義理論に立脚して、現代資本主義的企業の労働過程を改めて分析したという位置づけのものであるが、その後今日では、通常的には、過去のものとして扱われることが多いものになっている。それが、ワトソンでは現在でも有効な理論的枠組みとして提示されている。ここにも、現代資本主義の解明では、古典的な、つまり正当なマルクス主義理論が土台におかれるべきことが示されている。こうした所論をみると、少なくともイギリスでは、社会科学理論はマルクス説が土台におかれるべきことが今日でも当然のことになっているように、本稿筆者には思われる。

以上は、現代社会論のうちでも、“社会”に関連したものであるが、“現代”に関連しては、

スリフト説も、結局は、現代の社会動向の特色としてパフォーマンスの高揚を重要な立脚点の1つとするものであるとみられる。これは、パフォーマンス的転回 (performative turn) といわれるものであるが、この点に関連し、ここではドイツのディルクスマイヤー／ヘルブレヒトが、次のように論じているところを紹介し (Dirksmeier and Helbrecht, 2008, p.2ff.), 本稿の締めくくりの言葉とする。

すなわちディルクスマイヤー／ヘルブレヒトによると、パフォーマンスはある特定時点 (time) でなされるものであって、次の瞬間にはすでに過去のものになっている。すなわちそこでは、人々が知り経験するのは過去のものであるが、それがさも現在のものかのように提示されるところに発生的錯誤 (genetic fallacy) がある。ここで発生的錯誤とは、パフォーマンスの主たる価値や意味について、それが (突如として起きたものではなく) 一連の歴史的連続の中で (あるいは後で) 起きているものであることを忘れさせる作用のあるものであるが、ディルクスマイヤー／ヘルブレヒトは、過去が現在において結実すること、そして現在が未来において結実することは、当然ながら全く不確実なこと (radically ambiguous) であると改めて力説している。

つまり、パフォーマンスは、突如として起きるものではない。一連の歴史連続の中で起きるものである。しかし過去や現在に起きたことが未来でも必ず起きるという保証はない。パフォーマンス論は、この関連を曖昧にする危険があるというのである。ここでは、いわゆる現在 (あるいは現代) という“時”の持つ意味が問われることが提起されている。聞くべきところが大きいと思料される。

## 参考文献

- Agamben, G. (1998), *Homo-sacer: Sovereign power and bare life*, Stanford University Press.
- Asad, T. (1993), *Genealogies of religion*, Johns-Hopkins University Press.
- Boutang, M. Y. (2005), *Le capitalisme cognitif: La nouvelle grande transformation*, Amsterdam.
- Braverman, H. (1974), *Labor and monopoly capital: The degradation of work in the twentieth century*, New York: Monthly Review Press. (富沢賢治訳『労働と独占資本：20世紀における労働の衰退』岩波書店)
- Dirksmeier, P. and Helbrecht, I. (2008), Time, non-representational theory and the “performative turn” — Towards a new methodology in qualitative social research, retrieved 20. May, 2020, from: [https://www.geographie.hu-berlin.de/de/Members/helbrecht\\_ilse/downloadsenglish/performativemethodology/@@download/file/Dirksmeier\\_Helbrecht%20Time%20nonrepresentation%2020.03.2008.pdf](https://www.geographie.hu-berlin.de/de/Members/helbrecht_ilse/downloadsenglish/performativemethodology/@@download/file/Dirksmeier_Helbrecht%20Time%20nonrepresentation%2020.03.2008.pdf)
- Giddens, A. (1991), *Modernity and self-identity*, Cambridge: Polity Press.
- Grosz, F. (ed.) (1999), *Becomings: Explorations in time, memory and futures*, Cornell University Press.
- Latour, B. and Hermant, B. (1998), *Paris ville invisible*, Paris: La Decouverte/Institut Synthelabo.
- Lazzarato, M. (2004), From capital-labour to capital-life, *Ephemera*, vol.4, pp.187-208.
- Lee, B. and Lipuma, E. (2000), Cultures of circulation: The imaginations of modernity, *Public Culture*, vol.14, pp.191-213.
- Lingis, A. (1998), *The imperative*, Indiana University Press.
- Marx, K. (1939-41), *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie* (Rohentwurf, 1857-58) (高木幸二郎

監訳『経済学批判要綱』大月書店)

Negri, A. (1991), *Marxism after Marx*, London: Pluto Press.

Pred, R. (2005), *Onflow: Dynamics of consciousness of experience*, MIT Press.

Tarde, G. (1902), *Psychologie économique*, Paris: Félix Alcan.

Thrift, N. (2008), *Non-representational theory: Space/ politics/ affect*, London: Routledge.

Virno, P. (2004), *A grammar of the multitude*, New York: Semiotexte.

Watson, T. (2017), *Sociology, work and organisation*, 7th ed., London: Routledge.

大橋昭一 (2020) 「現代産業労働の6つのアプローチ：産業社会学における研究を中心に」『関西大学・商学論集』65巻2号, 57-76頁

——— (2021) 「スリフトの非表象理論 (NRT) の研究」『和歌山大学・経済理論』406/407合併号, 17-36頁

——— (2022) 「スリフトの非表象理論における社会理論の基本原則についての研究」『和歌山大学・経済理論』409号, 1-20頁

## Understanding the Theory on Modern Capitalist Society Based on the Non-representational Theory

Shoichi OHASHI

### Abstract

This paper engages with characteristics of the theory on the modern capitalist society presented by Nigel Thrift, in which fundamental theorems are based on the Marxian economic theories, evaluating the whole certainly so theoretically excellent, but thinking it so as a noteworthy point, that Thrift's theoretical analysis concentrates on the commodity production today.